

朝長

觀世元雅作

前

ワキ

清涼寺の僧

シテ

青墓長者の娘

トモ

従者

後

ワキ

前に同じ

ワキヅレ

伴僧

シテ

大夫進朝長

地は

美濃

季は

春正月

「是は嵯峨清涼寺より出でたる僧にて候。さても此度平治の乱れに。義朝都を御ひらき候。中にも大夫進朝長は。美濃の国青墓の宿にて自害し果て給ひたる由承り候。我等も朝長の御ゆかりの者にて候ふほどに。急ぎ彼所に下り。御跡をも弔ひ申さんと思ひ立ちて候。

道行
「近江路や。瀬田の長橋うちわたり。く。猶行すゑは鏡山。老曾の森を打ち過ぎて。末に伊吹の山風の。不破の関路を過ぎ行き。青墓の宿に着きにけり。く。

シテ、トモ次第

「花の跡訪ふ松風や。く。雪にも恨みなるらん。
シテ、トモ
「是は青墓の長者にて候。

「それは草の露水の泡。はかなき心のたぐひにも。哀を知るは習ひなるに。是は殊更思はずも。人のなげきを身のうへに。かかる涙の雨とのみ。しをるゝ袖の花薄。穂に出だすべき言の葉も。泣くばかり

なる有様かな。

下歌 「光りの陰を惜しめども。月日の数は程ふりて。

上歌 「雪の内。春は来にけりうぐひすの。く。氷れる
涙今は早。解けても寝ざれば夢にだに。御面影の
見えもせで。痛はしかりし有様を。思ひ出づるも
あさましや。く。

シテ詞 「ふしきやな此御墓所へ我ならでは。七日々々に参
り。御跡弔ふものもなきに。旅人と見えさせ給ふ
御僧の。涙をながし懇に弔ひ給ふは。如何なる人
にてましますぞ。

ワキ詞 「さん候是は朝長の御ゆかりの者にて候ふが。御跡
弔ひ申さんため是まで参りて候。
シテ 「御ゆかりとはなつかしや。さて朝長の御ため如何
なる人にてましますぞ。

ワキ 「是は朝長の御めのと何某と申す者にて候ひしが。
さる事有りて御暇たまはり。はや十箇年に余り。

かやうの姿となりて候。とくにも罷り下り。御跡弔ひ申したくは候ひつれども。怨敵のゆかりをば。出家の身をも許さねば。抖擗行脚に身をやつし。忍びて下向仕りて候。

シテ「さては取り分きたる御なじみ。さこそそは思し召すらめ。わらはも一夜の御宿りに。あへなく自害し果て給へば。たゞ身のなげきの如くにて。かやうに弔ひ参らせ候。

ワキ「実に痛はしや我とても。もと主従の御契り。是も三世の御值遇。

シテ「わらはも一樹の陰のやどり。他生の縁と聞く時は。實に是とても二世のちぎりの。

ワキ「今日しも互にこゝにきて。

シテ「弔ふ我も。

ワキ「朝長も。

地「死の縁の。所も逢ひに青墓の。く。跡のしるし

か草の陰の。青野が原は名のみして。古葉のみの春草は。さながら秋の浅茅原。荻の焼原の跡までも。げに北邙の夕煙。一片の雲となり。消えし空は色も形も。なき跡ぞあはれなりける。く。

「如何に申し候。朝長の御最期の有様くはしく語つて御きかせ候へ。

ワキ詞

シテ「申すにつけて痛はしや。暮れし年の八日の夜に入りて。門を荒けなく敲く音す。誰なるらんと尋ね

しに。鎌田殿と仰せられしほどに門を開かすれば。

武具したる人四五人内に入り給ふ。義朝御親子。

鎌田金王丸とやらん。わらはを頼みおぼしめす。

明けなば河船にめされ。野間の内海へ御落あるべきとなり。又朝長は。都大崩にて膝の口を射させ。

とかく煩ひ給ひしが。夜更け人静まつて後。朝長

の御声にて。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏と二声のたまふ。鎌田殿まるり。こはいかに朝長の御自害

候ふと申させ給へば。義朝おどろき御覽すれば。

はや御肌衣も紅に染みて。目もあてられぬ有様なり。其時義朝。何とて自害しけるぞと仰せられしかば。朝長息の下より。さん候都大崩にて膝の口を射させ。既に難儀に候ひしを。馬にかかり是までは参り候へども。今は一足も引かれ候はず。路次にて捨てられ申すならば。犬死すべく候。唯返すぐ御先途をも見とゞけ申さで。かやうになりゆき候ふ事。さこそゆひかひなき者と。おぼしめされ候はんずれども。道にて敵に逢ふならば。雑兵の手にかゝらん事。あまりにくちをしう候へば。是にて御暇たまはらんと。

「是を最期の御言葉にて。事切れさせ給へば。義朝正清とりつきて。なげかせ給ふ御有様は。よその見る目も。あはれさをいつか忘れん。悲しきかなや。形をもとむれば。苔底が朽骨。見ゆるもの

今は更になし。さて其声を尋ねれば。草径が亡骨となつて。答ふるものも更になし。三世十方の仏陀の聖衆も。あはれむ心あるならば。亡魂幽靈も。さこそうれしとおもふべき。

地「かくて夕陽かげうつる。く。雲たえぐに行く空の。青野が原の露わけて。彼旅人を伴ひ。青墓の宿に帰りけり。く。

シテ詞「御僧に申し候。見ぐるしく候へども。しばらく是

に御逗留候ひて。朝長の御跡御心しづかに弔ひ参らせられ候へ。

ワキ詞「誠に御志有難う候。暫くこれに候ふべし。

シテ「誰かある罷り出で、御僧に宮仕へ申し候へ。(中入)

ワキ「さても幽靈朝長の。仏事はさまぐおほけれども。

ツレ「とりわき亡者の貴み給ひし。

ワキ「観音懺法読みたてまつり。

二人歌「声満つや。法の山風月ふけて。く。光やはらぐ

春の夜の。眠りを覚ます鉦鼓。時もうつるや後夜の鐘。音すみわたる折からの。御法の夜声感涙もうかぶばかりのけしきかな。く。

「あらありがたの懺法やな。昔在靈山名法華。今在西方名阿弥陀。娑婆示現觀世音。三世利益同一体。まことなるかな誠なるかな。頼もしや。きけば妙なる法の御声。」

地 「吾今三点。」

シテ 「楊枝淨水唯願薩埵と。」

地 「心耳を澄ませる玉文の瑞諷。感應肝に銘ずる折から。」

シテ 「あら尊の弔ひやな。」

ワキ 「ふしぎやな觀音懺法声すみて。灯の陰幽なるにて。まさしく見れば朝長の。影の如くに見え給ふは。若々夢かまぼろしか。」

シテ 「もとより夢まぼろしの仮の世なり。其うたがひを

止め給ひて。猶々御法を講じ給へ。

「げにくかやうにま見え給ふも。偏に法の力ぞと。

思ひの玉の数くりて。

シテ
「声を力にたよりくるは。

ワキ
「まことの姿か。

シテ
「まぼろしかと。

ワキ
「見えつ。

シテ
「かくれつ。

ワキ
「おもかげの。

地
「あれはとも。いはゞ形や消えなまし。く。消え

すはいかで灯を。背くなよ朝長を。共にあはれみて深夜の。月も影そひて。光陰を惜しみ給へや。げにや時人を。待たぬ浮世のならひなり。唯何事もうち捨てゝ。御法を説かせ給へや。く。

シテクリ
「それ朝に紅顔あつて。世路にほこるといへども。

地
「夕には白骨となつて郊原に朽ちぬ。

サシ
「昔は源平左右にして。朝家を守護し奉り。

地
「御代を治め國家をしづめて。万機の政すなほなり
しに。保元平治の世のみだれ。いかなる時か來り
けん。

シテ
「思はざりにし弓馬のさわぎ。

地
「ひとへに時節到来なり。

クセ
「さる程に。嫡子悪源太義平は。石山寺に籠りし
を。多勢に無勢かなはねば。力なく生捕られて。

終に誅せられにけり。三男兵衛の佐をば。弥平兵
衛が手にわたり。是も都へぞ捕られける。父義朝
は是よりも。野間の内海に落ちゆき。長田をたの
み給へども。頼む木のもとに雨もりて。やみく
と討たれ給ひぬ。いかなれば長田は。ゆひかひな
くて主君をば。討ち奉るぞや。如何なれば此宿の。
あるじはしかも女人の。かひぐしくも頼まれて。
一夜の情のみか。かやうに跡までも。御弔ひにな

シテ
「もくいつの世の契りぞや。

シテ
「一切の男子をば。生々の父と頼み。万の女人を。生々の母と思へとは。今身の上に知られたり。さながら親子の如くに。御なげきあれば弔ひも。誠に深き心ざし。請けよろこび申すなり。朝長が後生をも。御心やすくおぼしめせ。

ロンギ地
「げに頼むべき一乗の。功力ながらになどされば。

シテ
「まだ嗔恚の甲冑の。御有様ぞいたはしき。

シテ
「梓弓。もとの身ながら玉きはる。魂は善所におもむけども。魄は修羅道に残つて。しばし苦しみを受くるなり。

シテ
「そもそも修羅の苦患とは。いかなる敵に合竹の。

シテ
「此世にて見しありさまの。

地
「源平両家。

シテ
「入り乱るゝ。

地

「旗は白雲紅葉の。散りまじり戦ふに。運の極めの悲しさは。大崩にて朝長が。膝の口をのぶかに射させて。馬の太腹に射つけらるれば。馬は頻りにはねあがれば。鎧をこして下り立たんとすれども。難儀の手なれば。一足もひかれざりしを。乗替にかきのせられて。憂き近江路を凌ぎ来て。此青墓に下りしが。雑兵の手にかゝらんよりはと。思ひさだめて腹一文字に。かき切つて其まゝに。修羅道に遠近の。土となりぬる青野が原の。亡き跡訪ひて給びたまへ。亡き跡を訪ひて給び給へ。